
赤い爪

あめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い爪

【Nコード】

N7953A

【作者名】

あめ

【あらすじ】

深夜二時の眩しい赤い爪。輝くネオンと静かな夜に、突然の来訪者。仕事のことなんて、気付いたら忘れてた。

「だからね、そう、疲れちゃったのよ」

深夜にいきなりインターホンを押してやってきた優子は深々と溜め息をついた。

決して広くないアパートの一室で、私は目を擦りながらコーヒーを沸かしていた。

優子の突飛な行動には慣れっこだし、それを迷惑と感じたこともない。

ただ少し苦い顔をしたのは、優子の手足の爪が真つ赤だったからだ。

「ペディキュアよ、ペディキュア」

コーヒーを沸かし終え、優子のもとに持っていったとき私が優子の手足を見ているのに気付いたのか、優子が明るく口を開いた。

キラキラと輝いているそれは、センスがいいのか悪いのか私には分からなかった。

「それでね、聞いてよ」

優子はコーヒーを一口啜り、改まって私に向き直った。

「ひーくんがね、また浮気したの」

思い切り殴ってやればよかった、と優子は口惜しそうに舌打ちした。

そんな優子に適当に返事をしながら私は時計を見た。

午前二時。

私も優子も仕事がある。

ただ今この優子の中に仕事という文字はないかと、私は諦めて優子の話に耳を傾けることにした。

「もう別れちゃおうかな」

優子は弱々しく呟いた。

ひーくんというのは、優子の恋人で、もう二年半の付き合いになる。

「浮気されるたびに聞くけど、その言葉」

私が呆れたように言っていると優子がいたずらっぽく微笑んだ。

「だあって、ひーくんの顔見ると許しちゃうんだもん」

結局今回も許すんでしょ、と優子の足の爪を見ながら私は言った。
暗い夜に光るネオンみたいだと私は思う。

きらびやかで、着飾っていて、眩しいのに温かい。

「聞いて。ひーくんね、この前転んだときに膝怪我しちゃって、傷口から血が出ちゃって、

なんだからあたしも赤いものが欲しいなあって思ったから、赤いペ
ディキュア塗ってみた」優子は、時々理解できない発言をする。

私はそういうとき反応に困るから、あー、とか、うん、とか適当に
相槌を打っていた。

結局のところ、心地がいいのだ。

深夜に押しかけてくる優子の迷惑な行動も、眩しい赤い爪も。

私は仕事のことを忘れて優子の話を楽しげに聞いた。

気付いたら寝ていて、朝優子の爪を見ると、朝日にかすんで爪の赤
は何だか薄くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953a/>

赤い爪

2010年10月10日23時47分発行